

## 「福音はだれのために？」

(ローマ15・7〜13)

## 一、「教会の一致とは

7節をご覧ください。〈ですから、神の栄光のために、キリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れ合いなさい。〉と、パウロは語りました。ローマの地に興されたイエス・キリストを主と信じる教会は、「互いに相手を受け入れ合いなさい」と言われる状況にありました。教会の一致とは何なのでしょ

ういうわけで強調点は、〈ですから、あなたがたは互いに受け入れ合いなさい〉であることが、お分かりいただけると思います。どのようにして、でしょうか？ それは〈キリストがあなたがたを受け入れてくださったように〉です。それが〈神の栄光のため〉になるわけですから、主のご意思に添ったことです。ですが、7節のことばを聞いただけで、「分かりました。そうします」と答えられる教会員はまれです。パウロは、そういうことは百も承知でした。そこで、何を語ったのでしょうか。

## 二、聖書の証言

8節前半を見てまいります。〈私は言います。キリストは、神の真理を現すために、割礼のある者たちのしもべとられました。〉と語りました。〈しもべ(ディアコノス)〉とは、奴隷の意味ではありません。「奉仕者」の意味です。キリストは神であられるのに、神の真理を現すために、割礼のある者たち、すなわちユダヤ人となって生まれられたということです。なぜパウロが、このようなことを語り出したのでしょうか。こういうことかと思えます。ローマの教会に連なっていた、ユダヤ人でない教会員は、もちろんキリストを信じていました。当然です。そこでパウロは語ります。あなたがたが信じているキリストは、ユダヤ人として生まれられた方なので

すよと。それが〈キリストは、神の真理を現すために、割礼のある者たちのしもべとられました〉の意味です。

こうしてパウロは聖書の話——キリスト教会からするなら旧約聖書の話——をするようになります。これは、とても健全なことです。なぜなら、キリストのことは聖書で語られており、キリスト教会の信仰は、聖書を基にして信じられているからです。8節後半より9節を見てまいります。〈父祖たちに与えられた約束を確証するためであり、また異邦人もあわれみのゆえに、神をあがめるようになるためです。〉それゆえ私は異邦人の間であなたをほめたたえます。あなたの御名をほめ歌います」と書いてあるとおりです。〈とあります。教会は好きなように信じたのではありませんでした。1世記はまだ「私たちはイエス・キリストをこのように信じます」という二カイア信条ができる前のことでしたから、使徒たちが語る福音のことばに権威がありました。使徒たちには、キリストの福音を語る権威が授けられていたからです。権威が授けられたからといって、好き勝手に語ったわけはありません。聖書を、すなわち旧約聖書を、キリストのことを証言している書として読み、解き明かしました。こうしてパウロは、ローマの教会員たちに、聖書を解き明かしました。それが、9節より12節まで続きます。パウロは、

「これでもか、これでもか」というほど、聖書からキリストについて、異邦人の救いについて語られている箇所を引用しています。ユダヤ人でない教会員に對して、キリストの出現と異邦人の救いは聖書ですでに預言されていた、と示しています。

## 三、希望の神

13節をご覧ください。〈どうか、希望の神が、信仰によるすべての喜びと平安であなたがたを満たし、聖霊の力によって希望にあふれさせてください。〉とあります。パウロは、様々にあらわされる神のご性質を〈希望の神〉とか、〈忍耐と励まし神〉(15・5)とか、〈平和の神〉(15・33)とか、語っています。聖霊なる神は、私たちがマイナスの思いに支配されそうになった時でも、不思議と良い方向に導いてくださいます(ローマ5・3〜5)。ゆえに私たちにとって神は、「希望の神」であり、「忍耐と励まし神」であり、「平和の神」です。そういう神を知るためには、主イエス・キリストを指し示している旧約聖書の証言が基本です。

ですが、律法に精通していたサウロ(後のパウロ)でも気がつきませんでした。復活の主イエスがサウロに現れた時、神の啓示によって、覆われていた覆いが取り除かれて、神の偉大な真理を知った次第です。